

2019年3月22日
日本オラクル株式会社

2019年5月期 第3四半期決算説明会 質疑応答要約

Q1. クラウドサービス&ライセンスサポートのそれぞれの伸び率の内訳について伺いたい。また、クラウドライセンス&オンプレミスライセンスが今期減収しているが、クラウドサービスへの移行状況について伺いたい。

クラウドサービス&ライセンスサポートについては、それぞれの内訳を開示していない。クラウドサービスには強い牽引力があり、2ケタ成長している。また当社はオンプレミス・ユーザーの顧客基盤を継続して持っており、ライセンスサポートの契約更新率は高い。これらの要因の混合によって、クラウド&ライセンス売上は前年比11.2%成長となり、クラウドサービスの高い成長率がこれに寄与している。

新規ライセンスについては、前期大型案件を獲得した反動減影響となっている。今期、いくつか商談中の案件があったが、Q4もしくはそれ以降の四半期にスリップしてしまった。通年で見ると、健全なビジネス状況にある。

多くのお客さまがクラウド移行を検討しているが、これによってオンプレミス・ライセンスの購買が止まるということではない。

Q2. Q2ではCash 1650億円ほどあった。Q3末では1,300億円が関係会社（Oracle US）への長期貸付金になっている。グローバルのキャッシュマネージメントの観点から実行したと想定しているが、意思決定した背景と余剰資金の利用方針を伺いたい。

以前と同様、オラクル・コーポレーションへの貸付を実行した。期限は2年以内であり、いつでも引戻し可能なオプションを持っている。

データセンターや買収などの投資機会を常に伺っている。当社は一貫した配当方針を持っており、これに従っている。過去には特別配当も実施しており、様々な選択肢を有している。

Q3. クラウドライセンス&オンプレミスライセンスで昨年の大型案件の反動減があったとのことだが、その影響額と、今後のパイプラインの状況について伺いたい。

影響額の適正な比較は難しい。すべてのパイプラインをクローズしたいが、交渉事である。これらのお客さまは、既にオラクル・ユーザーであり、プロジェクト推進のために新たにライセンスを購入されようとしている。いくつかの案件はQ4もしくはそれ以降の四半期にスリップしたが、案件自体がなくなったわけではない。Q4でカバーできるよう営業を前倒していく。

Q4. 日本オラクルが業績ガイダンスに対し順調に進捗していることは理解している。一方で IT 投資環境は順調で、多くの IT 企業が好調な業績となっている。日本オラクルの業績が、市場成長に対し下回っているように見えるが、オラクルにとっての課題はなにか？

当社が市場成長に対し、下回っているとは思わない。当社はテクノロジー市場において高いシェアを持っている。オラクルを比較する際の問題は、プレゼンテーションソフトなどのデスクトップツールを販売している企業が比較対象に含まれており、適正な比較にはならないことである。エンタープライズ・ソフトウェア市場において、当社は高いシェアを持っており、データベース分野においては、オンプレミス、クラウドにかかわらず市場シェアを獲得している。国内の大企業は、どのように、どのタイミングで、何のシステムをクラウド移行するか慎重に検討にしている。まだまだメインフレームシステムを運用している企業もあり、その一方で、メインフレームから一気にクラウド移行しようとする企業もいる。当社のチャレンジは、これらの企業にクラウドストーリーとともに販売していくことである。